

インタビュー：東京大衆歌謡楽団

- 平成育ちの3兄弟が語る 昭和歌謡の魅力 -

唄・高島孝太郎（33）、
アコーディオン・雄次郎（32）、
ウッドベース・龍三郎（29）の
若き3兄弟からなる昭和歌謡バンド、**東京大衆歌謡楽団**。浅草や上野
の路上ライブや YouTube などか
ら火がつき、いま、中高年の方々の
熱烈な支持を得ています。
北区での公演に向けてコメントを
いただきました。



左から雄次郎、龍三郎、孝太郎

——もとは池袋でスケートボードをやっていた仲間が集まって、世界の民族音楽を演奏していたとのことですが、民族音楽とはどのような音楽をされていたのですか？



孝太郎：

一番演奏したのはアイリッシュですね。

雄次郎はアコーディオンを習っていたので、ミュゼットとかシャンソンのような、ヨーロッパの民謡ですね。

——そこから昭和歌謡を始めるきっかけとなったのは？

孝太郎：最初は音的な面白さから入ったんです。

歌詞に関しては、僕たちはロックとかを聴いていたので、少し優しすぎると感じたんですね。

「りんごのうた」が一番最初に聴いたんですけど、

赤いリンゴに 口びるよせて

だまってみている 青い空

リンゴはなんにも いわないけれど

リンゴの気持ちは よくわかる

リンゴ可愛や 可愛やリンゴ

このような歌詞の内容は、現代だったら NHK のみんなの歌で流れるような、そういった世界観じゃないですか。

僕はロックやパンクロックが好きで、雄次郎はヒップホップが好きで、そんな音楽を聴いていた二人からすると、ちょっと優しすぎて、ひっかかっていたんです。

でも、音がかっこいいので、インスト（楽器のみで演奏）でやることになったんです。

そうしたら、年配の方がすごく好きだということがわかって、おもしろくなったんです。

で、チンドンヤさんで演奏する機会があった時に、老人ホームで演奏したんです。

その時の年配の方の反応が、それまで僕たちが外でいい加減に演奏していて、それを聴いた若い人たちの反応とは全く違ったんです。

「心の底から僕たちが演奏する音を求めている」と感じ、今まで生きてきた中で感じることのなかった人の顔があったんですよ。

それで、これはやっぱりいい音楽なんだ、と。

でも、ずっと演奏していると、（お客さんが）口をもごもご動かして、それを見ていると、何かその先に悲しさを感じたんですよ。

なんだろうと思っていたんですが、はっと気付いたんです。それは、リンゴの唄の2コーラス目のメロディーを弾き出した時に、それまで親方がサクスをふいて、僕がバイオリンを弾いていたんですが、それをやめて、僕が歌を歌ったんです。

そしたらみなさん、今までもごもごしていたものが解放されて、みんなが大きな声でリンゴの唄を歌いだしたんですね。歌詞カードもないのに。

その時に、ああ、これは、歌詞がないとだめな世界なんだ、と気がついたんですよ。

このメロディー、この歌の中に描かれている歌詞の内容や優しさを、みんなで歌う世界を、年配の方たちは懐かしんで求めていたんだと、その時わかったんですね。

ロックを聴き慣れていた僕たちが、その歌詞の内容を優しすぎてだめだと思っていた部分が、実は、昭和歌謡では一番大切だったということです。

それから、歌詞の内容もまた楽曲も同時に楽しめるようになって、どんどん夢中になっていきました。

——影響を受けた曲は何ですか？

孝太郎：「誰か故郷を想わざる」です。雄次郎がMDを送ってきてくれたんですよ。

故郷の富山で僕がちんどんをやっていたんもんですから。

その「誰か故郷を想わざる」を聴いた時に、自分はロックをやりたいと、世代の壁を作っていますね、その自分たちの世代だけで楽しむ音楽をやろうとして、またその価値観を求めるがため失ってしまった、家族のつながり、祖父母が一生懸命働いて僕たちのために残してくれたものなど、そういったものがいつ頃に頭の中に浮かんだんですよ。

この歌詞の中で気がついた、その優しさは、全て、実はもう近くに全部用意されていて、それらを、自分はやりたいことをやっていく中で失ってしまった。

その罪の深さに「誰か故郷を想わざる」を聴いた時に気付いて、それで、もう、この年代の音楽だけをやっていこうよ、ということを雄次郎に伝えた。

このバンドを始めるきっかけとなった一曲です。

それまでは、最初にやっていたバンドをどうやって、もう一回盛り上げようかなと、考えたりしながら音楽は続けていたんです。

——今回の北区での公演には、若い人たちにも足を運んでいただきたいと考えています。

孝太郎：若い人に聴いていただきたいという気持ちはあるんですけど、僕たちの本当に芯に刺さった入り方は、「反省」だったものですから、「反省」を人に強要すると、嫌なお説教じゃないですか。だから若い人に聴いてよって言えないんですよね。そこが難しくて。でも、僕たちみたいに、歌詞の内容や歌詞の世界の優しさに気付いた人は、若い人でも、おそらく聴いてくれると思うんですよ。

——自分（30代）は、ロックや最近のポップスを聴いていて、良い音楽だな、と思っても、どうも気恥ずかしくて、乗る（音楽に合わせて体でリズムを取ったりする）ことができません。しかし、東京大衆歌謡楽団さんの音楽を聴いていると、自然と音楽に乗って体が動きまわりました。もしかして、昭和歌謡というのは、聴いたことがなくても、日本人として、馴染みのある音、リズムなのかな、と感じたのですが・・・



雄次郎：

その人の育った環境とかも大きく影響してくるかと思うので・・・

そこまで掘り下げないとどこでつながっているかというのはわからないのですが・・・

例えば、聴きにきてくれる若い人たちがなぜ聴けるのかと言ったら、おじさん、おばさんとかかわりに対して抵抗がない、ということですね。

近所づきあいがあったりとか、家族のつきあいがあったりとか、兄弟が多かったりとか、何かしらのそういう関係を大切にしていたり、もしくは大切にしないといけないと、どこかで思っていたりする人は聴きやすいですね。

でも、自分の生活スタイルを確立させるために、まわりにある、自分の価値観で思っかっ悪いものを排除する人たちというのは、なかなか聴けないところがあって・・・

最近の若い人たちは、そういう流れが強いじゃないですか。

自分たちの文化を築いて、入ってくるなら入ってくるでよし、入ってこない人は別、という考え。そういう人たちが多いので、そういう風に考えると・・・

なんていうのかな、ま、つまり、カッコいいか、カッコ悪いかで判断する人たちは、聴き辛

かったりする可能性もありますね。

例えば、先ほど兄貴がいった、優しすぎるという歌詞、リンゴの唄の2番目は

あの娘よい子だ 気立のよい子

リンゴによく似た 可愛い娘

それ、若い価値観でいったらかっこ悪いじゃないですか。

だから、そういうところを受け入れられるか、受け入れられないかっていうことだと思いません。

孝太郎：いいこと言ってくれましたね。

お父さんとか、お母さん、おじいさん、おばあさんと空間を共有している時に、一緒に聴く音楽を見つけられる人かどうか。

そこにそういう音楽があるとしたら、それをみんなで楽しむことができる、またはそういう世界にあたたかさを感じる人、もしくは、そのあたたかさを見失ってしまって、さみしい気持ちでいる人、そういう若い人に届くかもしれないと思っていますね。

——昭和歌謡の魅力について教えてください。

孝太郎：昭和歌謡は、その時代の生活の景色にあった一部を切り取って歌にしている。

その中にすごく「人としてあらして（存在させて）もらおう」というか、「人間的なその心のあり方を保護してくれる、この情景」というか、何と云えばいいんだろう・・・

壊れていってしまう心をつなぎとめてくれる、やさしさがあふれていると思うんですね。

世代世代で共有しようとする価値観に固着してしまうと、最終的には、生きる理由がすごく小さくなってしまふ。

例えば、パンクロックには、21歳で死のうという価値観がある。

若い命をばっと謳歌して、好き勝手に生きて最後死ぬ、と。

それが、この社会に対するアンチテーゼだったりするんですけど・・・

そういう価値を求めていくと、生きる理由がなくなってしまう。

そういった世代世代にあわせて、ムーブメントがつくる価値観というのは、命の脈絡を壊してしまって、それをもう一度つなぎとめてくれる、やさしい世界が描かれていると思います。

雄次郎：全世代が価値観を共有しあえる。それが、昭和の歌謡曲の魅力ですね。

——北区にいらっしゃったことはありますか？

孝太郎：北区は友だちが住んでいたのでよく行きました。

雄次郎：飛鳥山公演に花見によく行きました。池袋でスケボーしてる頃。笑



龍三郎：

ベースを買ってるお店がここら辺（チラシの王子駅の写真を指して）です。笑

——北区のお客さんへメッセージをお願いします。

孝太郎：今、生きていて、日常の生活に流されて見失ってきている優しい心が、僕たちの歌う音楽の中に溢れているので、年配の方には、また昔の人のつながりの中にあっただたかさを思い出していただけたらと思います。

若い方には、さっきも言ったんですけど、何かおかしいな、と思っている、その答えがおそらくあると思うので、心がどんどん冷たくなっていってしまっているなと感じる、またそれは本来のあり方ではないんじゃないかと思ったり、悩んだりしている若い人に、聴いていただきたいです。

——3人の中で一番ファンが多いのは誰ですか？

孝太郎：雄次郎じゃないですか。

雄次郎：いやいやいや。

龍三郎：じゃあ、僕ということで。笑

雄次郎：じゃあ、龍三郎ということで。笑 やっぱり歌っている人が一番ですよ。

——先ほどお客さんと少しお話しした時も「孝太郎さんが・・・」ってお話されてる人が多かったように思います。

孝太郎：いやいや、お客さんはけん制しあっているんで。

乙女になっていらっしゃるんです。

こうっておいて、本当は誰々が好き、とか。

そういう風に、みなさん楽しんでくださっているようです。

あてにはならないですよ。笑

<番外編>

今回のインタビューは、4月9日に浅草で行われた公演終了後に行いました。

その公演にいらっしゃったお客さんにも少し話を聞いてみたところ、5年、10年と、彼らが隅田川で歌っていた頃からのファンだ、という方々も。

お客さんには年配の方が多いようですが、年配といっても、昭和も初期の頃となると、それほど馴染みがあるわけではないはずです。

そこで、どういうところが好きなのかを聞いてみると、皆さん口をそろえて言うのが

「一度聴いたら耳から離れない」。

また中には、「小さい頃におばさんが歌っていた歌で、その頃を思い出す。」や

「孝太郎さんの凜とした立ち姿に、若くして他界した父の姿を重ねて聴いているんです。」

といった方もいて、それぞれに、思い出や、思いを重ねて聴いているようでした。

(2017. 4. 9)